

研究主題： 子どもが、自らわかろうとする小学校英語の授業デザイン開発 ～6年生を中心とした実践を通して～

要約 金沢市は平成17年度より小中一貫英語カリキュラムの完全実施を行っており、6年生は中学1年の学習内容の3分の1を事前に学習する。小学校英語学習の最終段階として、改めて英語を学ぶ必要感をもたせるために、年間指導計画の中にアメリカ人の大学生や英語を学ぶ台湾の小学生との交流を絡めて、学ぶ目的意識と伝える相手意識から、英語をわかろうとする楽しさを知り、話したり書いたりして表現しようとする力が身についた。その結果、児童から「もっと学びたい。」「もっとわかりたい。」という積極的な思いが生まれ、英語に対して自らわかろうとする姿につながることができた。

キーワード 小学校英語教育 目的意識 授業設計 教材開発 間接的TV会議 自己評価

1.はじめに

(1)児童の実態

金沢市では小学校英語学習において、平成17年度から小中一貫英語教育を実施し、3年生以上に年間35時間の「英語科」が設置され、6年生には中学1年生の教科書が給与され、その3分の1の内容を学習する。

学年が上がるごとに活動中心だった内容が少しずつ難しくなり、「英語科」への目新しさの意識が薄れる中で、ゲーム・活動中心の学びだけでは満足できなくなり意欲が落ち「わからない」と感じる傾向が見られた。

(2)研究テーマの設定理由

また、学習した内容に自信がもてず受け身的な言動になっている児童から「もっと学びたい」「もっと知りたい」といった能動的な言動を引き出したいと考えた。そのためにどんなしかけを行うか研究し、それによって児童が、英語学習を自らわかろうとする姿に育つことを研究のゴールとして主題を設定した。

(3)研究の目的

児童自身が英語を学ぶ必要感をもち、「学ぶための目的意識と伝えるための相手意識」を中心に据えた授業デザインを研究し、児童が自ら「もっと学びたい。」「もっとわかりたい。」の思いをもつ姿に育てる。

2.研究の方法

(1)英語学習に対する意識調査

5月、小学3年から6年生を対象に、これまで行ってきた英語学習に対して、楽しさと理解度に関する意識調査を無記名で行い、学年を通しての傾向とその理由を調査する。対象児：3年生(101名) 4年生(83名) 5年生(99名) 6年生(84名)

(2)英語を話す必要感のある交流を絡めた授業設計

6年生の年間指導カリキュラムの中に、児童が英語学習に対して必要感をもって取り組むことができるような手だてを組み込む。前期はアメリカ人の大学生との交流を、後期は、台湾との交流を絡めた。(表1,2)

表1 アメリカ人大学生との交流を関連させた指導計画表

月	※単元名	学習内容	日本	アメリカ人大学生
4	Hello, English	これまでの学習のふり返しを行い、アルファベットのおさらいをする。		
5	ようこそ、グリーン先生	朝のあいさつや、自己紹介の言い方を知る。		
6	ようこそ、グリーン先生	自分の住んでいる所や好きなことを紹介する。	自己紹介を聞き取って、学習を生かして、自己紹介する。	自己紹介をしたり、ゲームやクイズをして仲良くなる。
	学校で	校内を案内する場面や、説明する言い方を知り、表現する。	自分達の学校の教室を紹介する言い方を知り、伝えたり、質問に答えたりする。	紹介を聞いて、伝わったことを知らせたり、わからないことを質問したりする。
7	学校で	建物について説明したり、尋ねたりする言い方を知り、表現する。	自分達の町の建物を紹介する言い方を知り、伝えたり、質問に答えたりする。	紹介を聞いて、伝わったことを知らせたり、わからないことを質問したりする。

※単元名は、前期、後期ともに、NEW HORIZON(東京書籍)1によるものである。

表2 台湾との交流を関連させた指導計画表(後期)

月	単元名	学習内容	日本の活動	台湾の活動
9	数字	自分の聞き取る力を知り、学習の成果を知る。	これまでの学習を生かして、何を伝えたいか聞き取る。	小学校の先生から交流を促すメッセージを送る。
10	グリーン先生の初授業	自分を紹介し、相手に尋ねる言い方を学ぶ。	自己紹介カードや折り紙などの作品や日本ペアを送る。	自己紹介カードや子どもの作品、台湾ペアを送る。
11	何の(誰?) 日本大好き	概要や要点を聞き取る。何であるかわからない物や一番好きな教科について尋ね合う。	質問に間接的TV会議で答える。自分のクラスの好きな教科や理想の時間割、休み時間や友達について表現したビデオレターを作って伝える。	日本から送られた折り紙について質問する。クラスが一番好きな教科を間接的TV会議で伝える。
12	日本大好き	毎日の朝食について尋ねたり答えたりする。	給食、夕食に何を食べるかを表現したビデオレターを作る。	授業や休み時間の様子の動画を送る。
冬休			志願園民小に出かけ、ビデオレターや児童の手紙、台湾ペアを送る。	ペアを渡し、クラス紹介の冊子や手紙を贈る。
1	曜日の言い方	曜日の言い方を知り、それを使って発話したり書き写したりする。児童英検を行う。		
2	私の自己紹介	自分で選んだ話題の自己紹介文を正しく書き、相手に正しく伝えるように話す。		
3	忘れ物	お礼を言ったり、返したりする言い方を使って簡単な会話文をつくって表現する。		

前期は、まず「楽しい授業」を意識するためにパペットと指導者が楽しく対話し、英語の表現に慣れさせ、何を話しているか聞き取る楽しさを伝える。

次に、アメリカ人の大学生(以下、Volunteer English Teacher として、VET と称す)との交流を絡めて、英語を聞き取り、話すことに対する自信を持たせ、英語を学ぶ楽しさに気づかせる。

単元内容を生かし、「自分達の学校や町のことを紹介しよう」という目的意識をもたせ、写真やカードを使ったり、クイズにしたりなど、工夫して紹介させた。

VET とは6月から7月にかけて、ALT が入らないショートタイムを中心に、5 回程授業を行う。授業は VET への紹介や発表だけでなく、VET と HRT とのティームティーチングも取り入れながら、行った。

後期は、英語を母語としない、台湾の同世代の児童を交流対象として位置づけることにした。交流対象児童は、台湾の小学5年生で、自分達と年齢や立場がほとんど変わらない。そのため、「台湾の友達も英語を学んでいるのだから、自分達もがんばって練習しよう。」や、「台湾の友達に、自分達の学校の様子を紹介したい。」などの思いが次々と生まれ、相手意識をもって意欲的に学んでいくことが可能となる。

交流の手段としては、実際の手紙の交換の他に「間接的な TV 会議」を利用する。これは児童が直接 TV 会議をするのではなく、台湾と日本の教師が TV 会議を行い、その内容を録画して児童に見せ、その様子をまた台湾の先生に伝えて交流するという方法である。

(3)交流した相手を意識した「書き写す力」の分析

10月と12月に、台湾に2回手紙を書く。表現方法がわからない児童のために、教師が正しい表記を6年生全ての児童に伝え、その表記通りに写させる「書く」学習に取り組む。

分析は1回目と2回目を比較し、それぞれの誤写の数の増減を指標とする。

(4)単元ごとの自己評価の分析

前、後期それぞれの最後に、学習活動が「楽しい」「わかった」について運勢ライン法で自己評価を行う。これは「実際の経験に関する感情変化を知るために用い、個々の場面とその全体での位置づけに関する生徒の質的理解についての素早い洞察を可能にする。」(チャート・ 村井ら・子どもの学びを深める 1995)のものであり、4 件法で表し、初めの意識ごとに分けて平均値を出す。

(5)後期の毎時間の自己評価の分析

授業の終わりに、1 時間の内容を「聞く」「練習」「活動」「まとめ」の行動に分け、児童一人ひとりが「わかった」と感じた満足度を、毎時間の授業で行動ごとに運勢ライン法で表す。初めの意識を3としてそれより落ちると2か1、上がると4か5を記すというように、4つの行動ごとに5 件法で表し、それらの平均値をどのような曲線の軌跡になったかを分析する。

3.研究の結果

(1)英語学習に対する意識調査

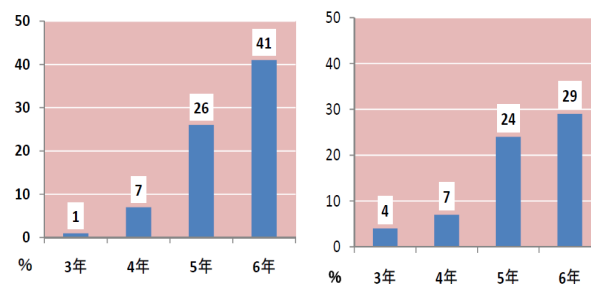


図1 学年別「楽しくない」子の割合

図2 学年別「わからない」子の割合

調査の結果、学年が上がるごとに「楽しくない」「わからない」と思う児童が増えている。

その理由項目としては、「ゲームが少なくなって楽しくない。」「難しくなって覚える気がしない。」「なぜ、普段使わない英語をやるか、わからない。」「英語が好きになれない。」などがあげられ、学年が上がるに従って、英語を学ぶ意欲が落ちている傾向にあることも明らかになった。

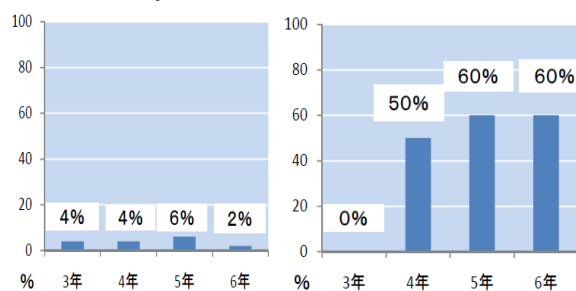


図3 「楽しい」子が「わからない」と思う割合

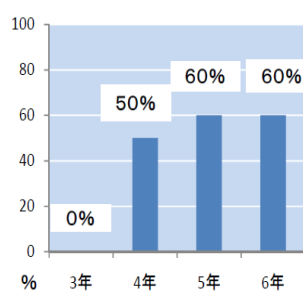


図4 「楽しくない」子が「わからない」と思う割合

また図3.4から、わからないと感じている児童の大半が、楽しくないとも感じていることがわかる。

つまり、英語をわかるようになるためには、まず児童が英語学習を楽しく思うことが大切なのである。

授業設計において、児童が「楽しい」と感じる支援を工夫し、その傾向が一番大きい6年生を対象にして研究を進めることとする。

(2)英語を話す必要感のある交流を絡めた授業設計

前期は、「楽しい授業」を意識させるために、ドラえもんのパペットを使って指導者が腹話術式に楽しい会話を英語のみで聞かせてきた。表現のおもしろさを楽しむ姿と共に、徐々に児童の発する声も大きくなり、休み時間には、自分でパペットをもって学習した内容をおさらいする姿も見られた。

自分達の学校や町を知らせる活動では、教科書に書いてある以外の「校長室」や「屋上」などの難しい単語でも、VET に伝えたいという思いから、すすんで調べ、練習する姿がたくさんみられた。また、グループ事に協力し合って VET がわかりやすいように、写真やカードを使ったり、楽しめるようなクイズを考えたりして、友達同士が楽しく交流し合う場面もあった。

後期は、英語年間指導計画に、台湾の先生や児童と、TV 会議などで対話する時間を位置づけられないため、英語担当教師が前もって台湾の先生と TV 会議をした内容を逐一ビデオで録画し、その内容を授業で子ども達に見せ、その記録をまた台湾の先生との TV 会議で見せた。そのような「間接的な TV 会議」で行う交流活動を行った。

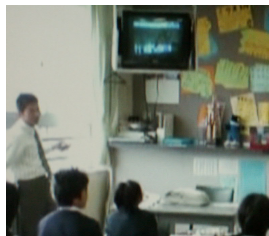


図5 台湾からの質問に答える児童



図6 台湾からの手紙を真剣に見ている児童

子ども達は、台湾の先生や生徒に対して質問したり、自分達の学校生活を紹介するなど、「台湾の小学生へ自分達の生活を伝えよう」という目的と相手意識をもちながら、直接話す事はできないにしても、手紙や贈り物の交換、自分達の代わりに台湾へ送ったぬいぐるみに思いを寄せたり、台湾から来たぬいぐるみと過ごしている様子をビデオで紹介するなどして、徐々に交流している実感を高めていった。その結果、次のような意識の変化が見られた。(図7, 図8 参照)

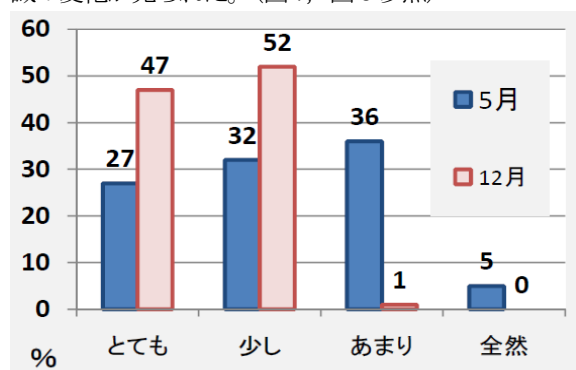


図7 「楽しい」と答えた6年生の割合

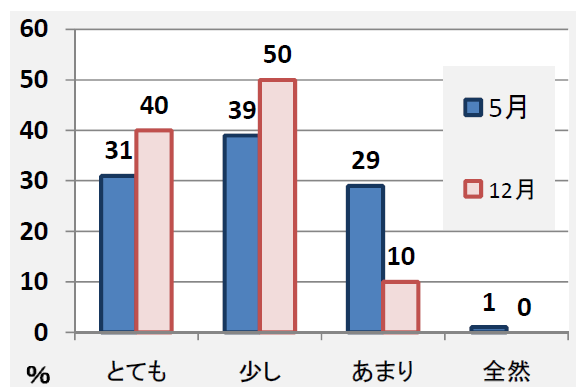


図8 「わかる」と答えた6年生の割合

「楽しい」と思う理由は、「話せたり聞けたりすると満足できるから」「英語が上達すると嬉しくなるから」など、一人ひとりに英語がわかるようになった自信が芽生え、単なる「ゲーム的な楽しさ」でなく、できたという自信につながる「学ぶ楽しさ」を感じていることが明らかとなった。

「わかるか」に対しては、全体的に「わかった」と捉えるようになった児童は増えている。「わかった。」については、児童一人ひとりが活動中に感じる主観的なものであり、友達とのやりとりやプリント等を使った理解度を確認するものなどから、自分自身で判断しているものである。仮に理解が不十分であっても、本人ができた喜びを感じ、もっと学ぼうと、より自分を高め、自らわかろうとする意欲を大切に考えていきたい。

また、12月に行った「心に残った学習活動」を尋ねると、春の「VET との交流授業」と、同世代の子ども同士の「台湾との交流」をあげる児童が多く、改めて相手意識をもつことの大切を感じた。(表3)

表3 心に残った学習活動

n=100 (回答数)	
VET との交流	21
会話	7
ゲーム	17
活動	15
台湾との交流	40

尚、ここで示す「会話」は、ALT と HRT (筆者) による本時の学習にふれる内容を聞き取る活動、「ゲーム」とは、英語に親しませるために遊びのある活動、「活動」とは学んだことを生かしてインタビューや会話を子ども同士で行う、発見や学びのある「活動」とする。

これらのことから、交流相手を意識できるような学習の流れや、子ども達の「伝えたい」「知りたい」という思いを常に大切にしていけば、英語を必要とする外国との交流を、直接的に行うことができなくても、子ども達は意欲的に英語を学ぼうとすることが明らかとなった。

(3)交流した相手を意識した「書き写す力」の分析

10月の手紙では、「台湾の5年生に自己紹介しよう」というめあてをもったが、「本当に相手に届くのか、伝えることができるのか」という半信半疑な思いもあり、子ども達の手紙を書く思いには、正確でなくてもよいという中途半端な思いが残っていた。

しかし台湾との何度かの間接的な TV 会議の後の、12月に書いた手紙では、以下のように表記の間違いが激減した。これは、下書き段階で添削された文字が、

表4 児童の「書き写す力」の表記間違い人数

時期	10月	12月
減少	46	74
増減なし	25	5
増加	11	2
合計人数	82	81

清書の段階でどれくらい正しい表記になったか、調査したものである。

10月には誤写を直されても、清書でまた同じ箇所を間違える児童が40%以上いたのに対し、12月

ではわずか8%に減少している。

台湾との交流で、手紙を書く相手が決まり、” Dear Tran.”のように相手の名前と送られてきたカードにある顔写真を見ながら、子ども達全員が相手意識を強く持ったためであると考える。

(4) 単元ごとの自己評価の分析

4月当初「楽しい」「わかった」について低い評価をした児童に、以下のような変容が見られた。4月当初の意識を4件法で分け、同じ意識同士がどのような満足度をもったのかを、それぞれの平均値で表したのが下のグラフである。(図9)

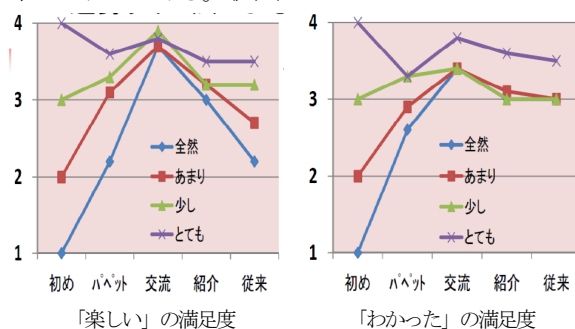


図9 前期単元ごとの満足度(運勢ライン法による)

VETとの活動CやVETに学校や町を紹介する活動Dでは、「楽しい」と感じる子が比較的多いのに対し、名刺交換EのVETが入らなかった授業では、「楽しい」の満足度が下がった児童もいる。ところが、「わかった」の満足度は、活動Eでもほぼ全員が満足できる結果となった。つまり、「楽しい」「わかった」について低い評価をした児童もVETとの交流や授業を経て、少しずつ英語をわかろうとする意識が上向いてきたことになる。

後期単元ごとの運勢ライン法の結果は以下である。

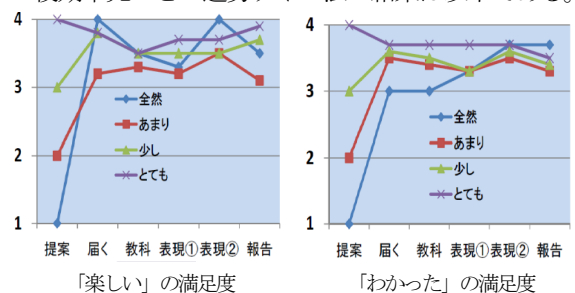


図10 後期単元ごとの満足度(運勢ライン法による)

前期に比べて、低い評価からスタートした児童の満足度の上昇がわかる。また「わかった」の満足度では、全てが上昇したことは、大きな成果といえる。

台湾からの贈り物が届いたところでは意識が上がり、自分達で工夫する応用の場面でも「楽しい」と感じ、理解しようと意欲的に取り組んでいることが見える。

つまり台湾との交流で児童の学習の目的意識が明確になり、意欲が持続し、「わかる」満足度を高めたといえるのである。

(5) 後期の毎時間の自己評価の分析

毎時間の授業で、4つの行動ごとにどのくらい理解したかの満足度を表した結果、全ての児童の平均値を出すと、4(だいたい満足した)以上となった。そこでそれをさらに分け、描いた軌跡の特徴とその理由についての分析を行った。(図11)

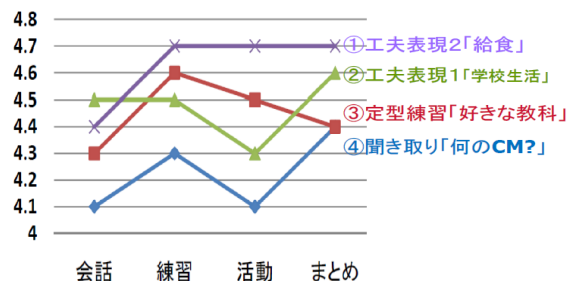


図11 授業ごとの運勢ライン法を用いた満足度

4回の授業のグラフの軌跡は、さまざまな特徴をもっている。③の授業は、教科書などでも繰り返し練習し満足度も上がるが、学習課題が「理解すること」と、与えられたインタビュー活動から、目的意識や相手意識が生まれにくく、まとめでは満足する思いが曖昧になる。それに対して①の授業では、「自分達がどんな給食を食べているか伝えたい。」という相手・目的意識の元、自分達で工夫した表現を考えるが、②の授業で1度経験したことが自信につながり、高い満足度が維持されている。

また、ここで注目したいのは『活動』で児童の意識が落ちたにも関わらず「何とかして理解したい。」と自分達で壁を乗り越えた②と④の授業である。全く初めての経験で自信をなくすが、台湾に伝えたい思いで、協力し合ってやりとげようとした②の授業と、CMの内容の聞き取りに困難を感じるが、台湾の先生からのメッセージをうまく聞き取れなかった経験から「自分の力で全てを聞き取りたい。」と願う④の授業での、「わからなかったことが自分の力でわかるようになった」満足度を大切にしたい。

このように、児童一人ひとりが台湾に伝えたいという相手意識や、学習が困難でうまくいかないという思いと向き合うことで、自分達で工夫し、英語をもっとわかりたいと思う意欲を引き出し、それが理解できた満足感につながるということが明らかとなった。

4.考察

英語学習に必要感をもち、目的意識と相手意識がはたらけば、学習者がすすんで学ぼうとする「わかる授業」につながるということがわかった。英語は、内容を理解するために学ぶのではなく相手と仲良くなり理解し合うための、コミュニケーションのツールとして学んでいくことが大切である。相手と仲良くなるために自分の思いを伝えたいという願いを意識すれば、学習者は英語に親しみながら、自信をもって使いこなそうとする「楽しい授業」を創り上げることができるのである。